

小特集

ソーシャル・マジョリティ研究

編集にあたって

坊農真弓 | 国立情報学研究所／総合研究大学院大学

ある日、稲見編集長に「『コミュ障と情報処理』のような特集ってできませんか?」と問いかけられた。「コミュ障」ということばはいまや巷に溢れかえっている。家に帰り、改めてその定義をネットで調べてみると、実に多様で驚いた。「コミュ障」のように短く略さない「コミュニケーション障害」には、視覚障害や聴覚障害などの身体的な障害も含まれる。一方で「コミュ障」と短く略すと、「コミュニケーションに入りづらい」「空気が読めない」などの心の障害を指すことが一般的である。しかし、「コミュニケーション障害」と「コミュ障」はシームレスに繋がっていると私は考えている。

2010年代に入り、「ソーシャル・マジョリティ研究」なるものが、本小特集の編者の1人である綾屋

紗月氏の旗振りによって誕生した。私は講師の1人として「ソーシャル・マジョリティ研究会セミナー2014」に登壇した。本セミナーの主催者は綾屋さんであった。彼女の依頼は、「ソーシャル・マジョリティに属する人々がコミュニケーションにおいてどのようにふるまっているのかを解説してほしい」というものだった。私はそれまで会話やジェスチャーといった相互行為の研究を進めてきた。その依頼を受けて初めて、自分はソーシャル・マジョリティの研究をしているのだと気づくことになった。

私は大学院生時代から、情報処理研究者に囲まれてコミュニケーションの研究を進めてきた。そこで私は、自分が得たコミュニケーションに関する発見や観察を情報処理研究者に手渡すことによって、よ



り魅力的な AI の開発やメディアの開発に繋がると信じてきた。コミュニケーションには目に見えないルールや秩序があり、人々はそれに気を配りながら、日々生活している。目に見えないものは当然機械可読性が低い。コミュニケーション研究者の仕事はそれらのルールや秩序を言語化し、機械可読性を上げることである。そんなある日、私は「ソーシャル・マジョリティ研究」と出会い、コミュニケーション研究の新たな可能性に気づかされ、とても胸が震えた。

本小特集は、「ソーシャル・マジョリティ研究事始め」のような内容になっている。丁寧に書かれたいくつかの記事からは本研究が始まった経緯や社会的背景を知ることができるだろう。一方で、「ソーシャル・マジョリティ研究」を情報処理にいかにつなげていくかはいまだ明らかではない。実際、情報学の研究者らに本小特集の記事の執筆を依頼したが、「ソーシャル・マジョリティ研究」のコンセプトには同意するが、実際に新しい技術の開発やメ

ディアの開発をしている段階ではないため、記事を執筆する段階ではないという声をいただいた。

「コミュ障」はいまや日本社会が抱える問題である。しかしながら、情報処理技術がどのようにこの問題に立ち向かい、新しい社会を築いていくかという問いは、いまなお広く開かれている。本小特集は、「コミュ障」ではなく、「コミュニケーション障害」を主として扱っている。まず、当事者とともに「コミュニケーション障害」を考えることで、日本社会あちらこちらに見られる「コミュ障」の問題を徐々に捉えることができるようになるのではないだろうか。そして、それらの問題を抱えている人々を情報処理技術が支援する世の中の実現を、私は切に願っている。

最後に、本小特集をきっかけとして多くの情報処理研究者が「ソーシャル・マジョリティ研究」のスタートラインに立ってくれることを、編者一同期待している。

(2019年8月12日)